

酷暑の東京五輪

写真は日経新聞 8 月 20 日夕刊。8 月の東京・熊谷で気温が 30 度以上となった時間帯。朝から 30 度以上観測、熱中症対策、午前からと。

8 月 19 日にもレポートしたが、酷暑のなかで開催される東京五輪について、朝日新聞 8 月 24 日「多事奏論」でも、理想との「温度差」鈍い IOC などと問題を投げかけている。抜粋して紹介したい。

東京五輪の招致委員会が国際オリンピック委員会 (IOC) に提出した立候補ファイルにある記述が今、蒸し返されている。7 月 24 日が開会式で、閉幕は 8 月 9 日という大会日程に関する部分だ。「晴れることが多く、かつ温暖であるため、アスリートが最高の状態でパフォーマンスを発揮できる理想的な気候である」虚偽記載だとツッコまれても仕方ない一方、招致に勝つ戦略として、正直に「熱中症に要注意」と書けないのも理解できる。

例えば、だ。立候補ファイルに「真夏を避けて秋開催を要望する」と書き、認められないなら招致レースから潔く撤退する。選手、観戦客に快適な環境を用意する熱意を IOC に訴えていたら？ おそらく最終選考に残れたかどうかも疑わしい。実際、中東カタルのドーハは酷暑を避けるため、2020 年大会に 10 月開催で挑んだ。そして、1 次選考で落ちた。IOC は落選理由に、「テレビ放送時間を確保しづらい」ことを挙げた。IOC は全収入の約 7 割を占める放送権料を払ってくれるテレビ局に配慮し、7 月 15 日～8 月 31 日におさめるよう招致都市に求めた。この時期なら、サッカー、アメリカンフットボール、バスケットボールなど欧米のプロスポーツとの競合が少ないからだ。近年の IOC の姿勢では、夏季五輪は 7～8 月の開催をのむしか勝算はない。だから、立候補都市はスポーツに不適な季節であっても、ウソも方便と開き直る。

本来なら、炎暑五輪のリスクについて、開催都市を決める 1 票をもつ IOC 委員が真剣に考えるべきだが、感度は鈍い。不思議とは思わない。当事者意識を持ちにくいのだ。これまでの慣例にならえば、委員たちは五輪期間中、運転手付きの車で会場を行き来し、長蛇の列とは無縁で VIP 席に座る特権を持つ。だから暑さなんて、どこ吹く風。日ごろ吹聴するアスリートファーストはきれいごとに過ぎない。

五輪憲章で「環境問題への関心」をうたうのに、コスト面でも出費がかさむ酷暑五輪には無頓着の言行不一致。オリンピックファミリーに内なる改革は期待できない。

やっとな東京五輪リスクが大手マスコミでも、ぼちぼち報じられるようになってきた。この点は評価したいが、五輪や万博という国家イベントを「聖域」扱いしないでほしい。

(2019 年 8 月 29 日)

日付	東京	熊谷
1	午前8～午後8時	※午前9～午後8時
2	午前8～午後6時	午前8～午後9時
6	午前8～午後7時	午前8～午後9時
7	午前8～午後6時	午前9～午後9時
8	午前7～午後6時	※午前8～午後8時
9	午前8～午後6時	※午前8～午後8時
11	※午前8～午後5時	※午前10～午後6時
13	※午前10～午後4時	※午前10～午後9時
17	午前8～午後6時	午前9～午後9時
18	午前8～午後7時	※午前9～午後7時

(注) 日付は東京の最高気温が35度以上の日。※は雨の記録あり。気象庁の資料をもとに作成